

[コメント 2]

## 都市文化創造に果たすミュージアムの役割

図師 宣忠  
(COE 研究員・京都大学)

今回のシンポジウム「歴史遺産と都市文化創造Ⅱ」では、四人の報告者がそれぞれ、上海・釜山・クアラルンプール・大阪をフィールドとして、史跡や文化財などの文化遺産・歴史遺産の保存・活用の実態について報告を行った。現在、世界各地で文化遺産の重要性が認識されるとともに、その保存・保護の動きが高まってきている。そうしたなかで、比較都市史の観点から歴史遺産の保存・活用の問題にアプローチする本プロジェクトは、都市文化創造を考えるうえで重要な意義をもつであろう。しかし、何を「遺産」として認定するのかという問題をしっかりと踏まえることがなければ、そうした動きは本当の意味での都市文化創造には結びつかない。そこで、ここでは今回のシンポジウム全体に対する若干の私見を述べたうえで、都市文化創造に向けた提言を行いたい。

それぞれの報告において、どういった文化遺産がいかにして保存され、どのように活用されているのかについて四都市の状況が示されたが、各都市における文化遺産の保存・活用の仕方には、各都市を取り巻く状況の違いが特徴として表れていた。つまり、各都市における市街地化の度合い、歴史的な建造物の残存状況、文化財保護に関する法の整備、都市計画などの複合的な要素によって、埋蔵文化財、史跡、無形文化財といった文化遺産の保存・活用のあり方が規定されるのである。しかしここで重要なことは、たんに「古い」ものがそのまま「遺産」として認定・保存されるのではないという点である。何が記憶の対象であり何が忘却の対象となるのか、何が「遺産」として認定されるのかについては、それぞれの時代・社会特有のフィルターが存在しており、何を残し、何を破棄するのかとい

う選択自体が、各都市のバイアスを色濃く反映するものなのである。逆に、そうしたフィルターやバイアスを都市文化に内在する要素として捉えることもできるだろう。こうした観点から都市文化を読み解いていくことで、歴史遺産の保護・活用を通じた都市文化創造はより明快な方向性を得ることになるはずである。

さて本シンポジウムでは、歴史遺産の保護・活用にあたって各都市の博物館が果たす役割の重要性が確認された。そこで都市文化創造に向けての提言として、都市においてミュージアムが果たすべき役割を指摘しておきたい。「ミュージアム」とはそもそも、博物館や美術館だけでなく、図書館・文書館、動物園・植物園・水族館をも含める概念である。1990年代以降、ニューヨークやパリ、グラスゴーなど欧米諸都市の取り組みを受け、日本でも数多くのミュージアム関連の書籍が出版され、ミュージアムについての議論が活発になってきている。そうした流れのなかで、ミュージアムはより幅広い文脈で、多角的に把握されるようになってきた。従来、ミュージアムの機能は、コレクションの収集、保存、研究、展示、教育として捉えられていた。なかでもコレクション重視の立場から、もっぱら収集、保存、研究に力が入られ、展示、教育が下位に置かれる場合も少なくなかった。しかし、近年、「コレクションから利用者へ」と重点がシフトするとともに、ミュージアムの機能が見直されることになった。ミュージアムは、さまざまな体験、学習、憩い、交流、教育、創造の場としての機能をもつことになるのである。人とモノの関わりあいをミュージアムが創りあげていく。近年、このようなミュージアムを中心に据えたまちづくりの取り組みが注目を集めている。詳しくは、上山信一・稲葉郁子『ミュージアムが都市を再生する—経営と評価の実践—』（日本経済新聞社、2003年12月）を参照されたい。また、東京大学総合研究博物館小石川分館で開催された特別展「MICROCOSMOGRAPHIA—マーク・ダイオンの『驚異の部屋』展（2002年12月7日～2003年3月2日）は、現代美術家が東京大学の学術標本や廃棄物を再構成するというインスタレーションで話題を呼んだ取り組みであるが、現代アートの文脈からアートと科学を捉えなおしていこうとするこうした試みは、ミュージアムの新しい方向性を示すよい例となろう。アートとの関連で言えば、音楽、演劇、映像、ファッション、デザイン、クラフト、美術品、建築などといった創造的な活動とミュージアムの活動との相互関連は徐々に強まってきている。また、ミュージアムの役割を考えるうえで、テレビ、出版、広告などメディア産業との連携も重要な要素となる。このようにミュージアムは都市において多様な役割を果たしながら、今後ますます

すまちづくりに貢献していくであろう。

これまでのミュージアムではもっぱら集客やミュージアム自体の単体収益などが問題とされてきたが、これからの利用者重視の立場からは、メディアとしてのミュージアムの役割が重要になってくる。つまり、ミュージアムが人々にメッセージを伝える場となるのである。その際に、何を伝えていくのかという伝えるべきメッセージは、研究の領域との密な連携のもとで提示されなければならない。こうして、人とモノとの出会いの場として創造的な活動を支援するミュージアムの機能に注目するなかで、ミュージアムと研究との接点が見出されることになる。都市社会における人・モノの関わり合いの様相、またそうした関係性の変遷を考察する都市史研究は、今後のミュージアムの教育活動を支える重要な役割を期待されることになる。そうした意味で、本プロジェクトは新たな都市文化創造に向けて、研究活動とミュージアムの活動を結びつける回路の構築を目指し、更なる努力を続けていかなければならない。